

# 碧南鑄物の祖 国松十兵衛家終焉の検証

— 辻村鑄物師の本家と出職・出店先に関する一考察を含めて —

碧南市史資料調査員 杉浦 和文

## はじめに

碧南市は、衣浦港をはさんで、知多半島の各地と昔から様々な分野で交流があり、今回、このように碧南市の取り組みを紹介させていただくことをまず感謝したい。

国松十兵衛は、釜六と呼ばれた太田六右衛門、釜七と呼ばれた田中七右衛門ほどの知名度はないが、この地方では、菅生（岡崎市）の安藤三郎五郎近重と木村重左衛門、金屋（豊川市）の中尾与惣治と中尾重右衛門、そして平坂（西尾市）の太田庄兵衛などととも名を残している鑄物師である。

碧南市や西尾市（とくに平坂地区）が鑄物産業の集積地であることは多くの市民が周知のことであるが、碧南の地で鑄物業を開始した国松十兵衛を知っている市民はほとんどいなかった。そこで、碧南市の鑄物工業の祖となる国松十兵衛の名を広く知ってもらいたいと、平成24年11月に、「碧南鑄物の祖 国松十兵衛」と題した文化財展を開催した。

今回の文化財展開催に向けて取り組む過程で、調査や史料発掘を進めた結果、これまでは曖昧であったものが解明されたり、伝えられてきたことの誤りも見つかってきた。新しく発掘した史料の検証を通して、三河を代表する鑄物師の1人である国松十兵衛の、とくにその終焉についてと辻村（現滋賀県栗東市辻）とのかかわりについてまとめ直してみた。

なお、文化財展では「国松十兵衛」の表記に統一したが、ほかにも国松重兵衛・国松十兵衛・国松重兵衛など様々な表記があった。松江在住の初代から八代までは「国松十兵衛」の表記が多いように思われ、辻村ではほぼ「国松重兵衛」で統一されていたことから、以降は、一般的な呼称及び松江の関連は「国松十兵衛」、辻村関連は「国松

重兵衛」と使い分けることとした。

## 1 「国松十兵衛」とは

碧南市の鑄物業は、延宝4年（1676年）に、近江国栗太郡辻村より国松十兵衛・七郎兵衛親子が大浜村松江の地にやってきたことから始まる。

「近江栗太郡志」によると、

出店先「三河松江」  
出店名義「近江屋忠右衛門」  
人名「重兵衛」  
営業品目「小間物荒もの」

となっている。同じく辻村から太田庄兵衛が寛文11年（1671年）に平坂に出店した5年後のことであり、初代「家次（重政）」から八代「忠平」が国松十兵衛を名乗った。

寺社関係の鑄造品で、国松十兵衛の作品は、

### ・初代「家次」・二代「七郎兵衛家園」

棚尾	妙福寺	梵鐘（1678年）
元刈谷	長遠寺	梵鐘（1678年）
小垣江	竜江寺	梵鐘（1680年）
上横須賀	宝泉寺	梵鐘……現存 （西尾市指定文化財）（1680年）
根崎	宝林寺	梵鐘（1683年）
足助	覚性院	梵鐘（1691年）
足助	宝珠院	梵鐘（1699年）

### ・三代「富教」

大浜	称名寺	喚鐘（1697年）
滋賀県湖南市	長寿寺	梵鐘……現存 （1708年）
上郷渡刈	祐蔵寺	鰐口……現存 （1709年）

刈谷小山 敬専寺 梵鐘 (1735年)

・四代「茂喬」

西尾 聖運寺 梵鐘 (1745年)

大浜 称名寺 梵鐘 (1747年)

三重県度会郡 竜泉寺 梵鐘 (1751年)

吉良 正法寺 梵鐘 (1751年)

吉浜 宝満寺 喚鐘……現存  
(1752年)

平七 東正寺 梵鐘 (1756年)

・五代「光同」

吉浜 正林寺 梵鐘 (1758年)

桜井 松韻寺 梵鐘 (1762年)

・六代「光重」

西幡豆 祐正寺 喚鐘 (1771年)

鷲塚 川端蓮成寺 喚鐘 (1772年)

神有 応春寺 梵鐘 (1773年)

荒子 等覚寺 梵鐘 (1778年)

赤松 本楽寺 喚鐘……現存  
(1801年)

松江部落 喚鐘……現存  
(1810年)

・七代「光圀 (邦・國)」

大浜 海徳寺 梵鐘 (1822年)

松江稻荷社 鉄湯釜3口…現存  
(1829年)



松江稻荷社の鉄湯釜 (同じものが3口)

中山 光正寺 喚鐘……現存  
(1829年)

高棚 空臨時 喚鐘 (1832年)

棚尾 安専寺 喚鐘……現存  
(1832年)

伏見屋新田 喚鐘……現存  
(1832年)

神有 応春寺 喚鐘……現存  
(1832年?)



松江部落の喚鐘

である (鐘の呼称には梵鐘、半鐘、喚鐘があるが、鐘樓に吊るす大きなものを梵鐘、それ以外の小さなものをすべて喚鐘で統一した)。ほかにも国松十兵衛作らしきものがあるが、銘が無かったり、太平洋戦争中に供出されて現存しない上に史料が残っていないなどで断定が出来ない。

## 2 国松十兵衛家の衰退

伊能忠敬が全国測量を行った折、享和3年(1803年)4月18日に「大浜湊松江 国松重兵衛」宅に宿泊をしている。当時の国松十兵衛は、六代「光重」であり、かなりの名家であったことが推測される。しかし、やがて天保の時代になると、国松十兵衛家の運命は大きく変わることになる。

天保12年(1841年)に郡奉行へ差し出した

「大浜村高反別明細帳」によると、

- ・天明2年12月御用達並
- ・文政2年7月御紋付上下拝領
- ・同10年御用達
- ・同12年御紋付御小袖一代苗字御免
- ・天保6年12月御紋付御小袖苗字御取上げ御用達並末席

となっている。文政12年(1829年)頃に最盛期を迎え、天保6年(1835年)には家業は衰退している。さらに、

天保十二己丑正月、北金屋重右衛門弟永次郎暫く借受候、後重右衛門より申越  
 (「安政三年改鑄物師名前帳」(真継家)より)

のように、国松十兵衛の鑄物師株を天保12年(1841年)から中尾家へ暫く(10年間)譲り、中尾重右衛門の弟の中尾永治郎(栄二)が鑄造を受け継ぐことになった。

天保3年(1832年)頃に七代「光圀」が鑄造した喚鐘が複数現存しているが、それ以後のものは見つかっていない。天保年間での、国松十兵衛家の急激な衰退はなぜであろうか。すぐ東隣の平坂で鑄物業を営む太田庄兵衛家は、さらに繁栄をしていく状況にあり、鑄物不況とは考えにくい。「光圀」(俳号「保舟」)の俳句仲間で親交の深かった明治用水計画発起人の都築弥厚(俳号「和楽」)が、莫大な借金を残して死去したのが天保4年(1833年)で、国松十兵衛家衰退と時を同じくしている。これは偶然の一致であろうか。残念ながら、その点を解明する史料が見つかっていない。

ただ、天保11年(1840年)に栗東市にある辻天満宮の常夜灯寄進者に名を連ねていたことを考えると、中尾家に鑄物師株を譲る前年までは、国松十兵衛家もなんとか体裁を保っていたものと思われる。

### 3 国松十兵衛家終焉

#### (1) これまでの説

『御鑄物師 勅許 国松十兵衛』(昭和51年 碧南市鑄物工業協同組合編集)によれば、

晩年不遇のまま光圀は三女、四女と共に辻村に隠退してしまった。安政年間のことであろう。文久元年10月には親類国松長右衛門が名代として上京、遂に真継家に鑄物師廃業の届出をしている。感慨如何ばかりであったろう。そして辻村の地で慶応3年(1867年)9月に70歳でもってこの世を去ったのである。有為転変をまさに織りなす生涯であった。小さな墓石がその後の風雪に耐えている。

(中略)

(八代目国松忠平は)明治19年9月30日重太郎を改めて養子入籍して間もなく、翌年正月17日自身が60才をもって命を終った。妻さみが直ちに家督を相続したが、3月4日養子離縁、5月5日には家屋を売渡して翌日には忠平の実家、幡豆郡味浜村(一色町)77番戸高須新三郎宅内へ妹せつと共に転住寄寓してしまった。重ね重ねの不運であった。せつは幼時からの盲人であったのである。さるとせつはすでに55才と39才であった。両人は琴などを弾いて暮らしていたようであるが其後の消息と没年は定かではない。遂に国松家の終焉であった。

となっている。乏しい史料の中で、執筆の中心となられた故小笠原奎司氏をはじめ、編集委員の方々が検討を重ね、推測を交えてまとめられたものである。今日まで、ここに記載されたことが史実として捉えられてきた。

#### (2)新事実の発掘

##### ①これまでの説の検証

七代「光圀」の没年を慶応3年(1867年)と推測した根拠は、栗東市辻の共同墓地に今も残る、「釋 豊智・妙祐」と刻銘のある、慶応3年(1867年)秋に建てられた次の「写真1」の墓の存在からであろう。



写真1 「釋 豊智・妙祐」の刻銘の墓

しかし、調査の結果、これは異なる人物の墓であることがわかった（詳細は後述）。

では、「光圀」はいつ亡くなったのか。その答えが、嘉永7年（安政元年・1854年）の大浜陣屋の日記にあった。

二月廿五日 晴小風

- 一 大浜村字松江重兵衛存生中、天保十四卯年、名古屋表より妾相抱候処、其後弘化二巳年、妾きり病氣養生旁里方へ罷越し候処、其後十兵衛義、内々右妾方へ罷越し同居罷在候処病氣差発り、同年冬十兵衛出先ニおゐて死去いたし候次第、（後略）

七月朔日 晴

- 一 鷲塚村片山八次郎江相懸り候当村  
松江国松十兵衛妾之由、（後略）

七月三日

- 一 鷲塚村片山八次郎親類大浜村字松江  
十兵衛方（後略）

十兵衛（重兵衛）が登場する記述の内の一部であるが、日記に登場するこの十兵衛（重兵衛）なる人物は、

- ・苗字が国松であること
- ・松江の住人であること
- ・鷲塚の片山八次郎の親類であること  
（六代「光重」、七代「光國」は、それぞれ十九代・二十代片山八次郎の娘を嫁にしている。）

から、鋳物師の国松十兵衛で、七代「光圀」と断定してよい。つまり、七代「光圀」は弘化2年の冬に亡くなっていたことになり、三女、四女とともに辻村に隠退していないし、慶応3年（1867年）70歳まで生きてはいない。

また、八代「忠平」についても、味濱（現西尾市一色町）の高須家からの手紙（「資料2」として後掲）では、没年が明治19年（1886年）であり、寺子屋での教え子たちが建てた墓によれば、明治26年（1893年）11月に59歳で亡くなったことになっている。事実はどうであるか今のところ不明であるが、これまでの説の信憑性は怪しいと考えなければならない。

さらに、次に述べる豊橋の國松家の出現によって、国松十兵衛家終焉までを大きく修正しなければならなくなった。

## ②豊橋の國松家に残る文書より

辻歴史研究会会長の田中明雄氏からの情報で、豊橋の國松本店の存在を知った。早速連絡をとってみると、ご主人（平成25年2月17日に死去、75歳）の祖父が國松重兵衛を名乗っていたことが判明した。

國松本店に関するブログによると、

「明治時代中頃、味噌醤油醸造業の井ヅヘイが船町で浜納豆の製造を始め、『吉田ハツ橋納豆』として売り出しました。当時井ヅヘイの番頭を務めたのが、國松重兵衛です。井ヅヘイの浜納豆は國松本店が今に引き継ぎ、……」  
となっていた。この國松家の過去帳に、「まん」とは」という二人の女性の名前があり、

俗名 服部まん 國松家ヨリ服部家へ嫁ス  
川村とはノ姉ナリ

俗名 川村とは 國松家ノ相続人ナリシキ  
故アリテ 四日市中町 川村又助氏へ嫁ス

と書かれていた。「とは」は、栗東市の共同墓地にある「写真2」の「國松家累代之墓」を建立させた「國松重兵衛第四女」の「川村とは子」である。夫の「川村又助」は、四日市の万古焼普及の功労者であり、真珠養殖の御木本幸吉の親友で、アコヤ貝の中に入れる核の製造に関して協力した人物である。

國松家を継ぐはずだった「とは」が川村家に嫁いでしまい、國松家の後継者がいなくなったことで、「まん」の嫁ぎ先、豊橋の服部家で國松家を引き継ぐことになった。



写真2 國松家累代之墓

そして、「まん」の息子である服部平之助の妻「みな」の、「とは」の病気見舞いで四日市に滞在中だった「まん」に出した、明治41年（1908年）の手紙では、

五日午後、國松兩人も無事ニ帰宅仕候

と、「國松兩人」が登場する。「御兩人」でなく「兩人」との表記から考えて身内であり、「(服部家から)無事ニ帰宅仕候」とあることから、別に家を作って住んでいたであろうことがわかる。この「國

松兩人」は、平之助が三河一宮の砥鹿神社の日下部家から養子に迎えた、前述のブログに登場した井ヅヘイ番頭の國松重兵衛夫妻だと考えられる。

さらに、國松家に残る文書では、豊橋の「まん」、四日市の「とは(とは子)」のほかに味濱(現西尾市一色町)の「さい」の存在がわかる。七代「光圀」の長女で八代「忠平」の妻「さい(さる)」である。「とは」は手紙の中で「まん」のことを「御姉上様」と書いているから、この二人は姉妹であるが、果たして「さい」はどうであろうか。

松江の組長が、明治29年（1896年）に「まん」宛てに出した手紙には、

(前略) 松江村方一同、國松先祖ニ大恩有候  
村方故、先代之大祭仕度候ニ付

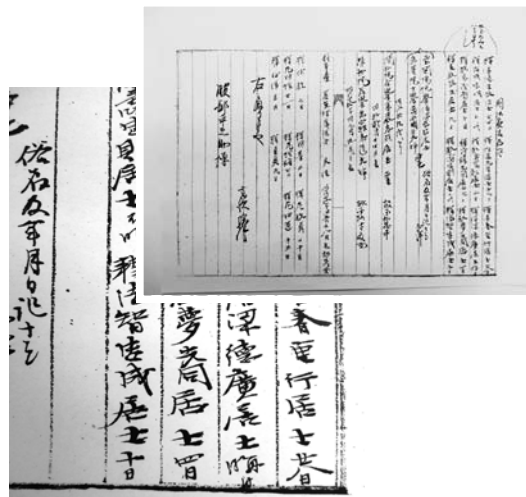
(中略) 姉君御貴殿初メ、四日市・味濱、御  
三名ハ、必ず、先代之祭故、何ヲ捨置ニ可成  
申とも(後略)

と書かれ、「さい」「まん」「とは」が姉妹であり、しかも國松十兵衛の娘であろうと推測できる。おそらく七代「光圀」の娘である。

長女「さい」は松江の國松十兵衛家に暮らし、三女と思われる「まん」と四女の「とは」は辻村で暮らしていたのであろう。姉妹が別々の土地で暮らしていたのは、辻村鋳物師の出職・出店のあり方と深くかかわっているのではないかと考えられる。

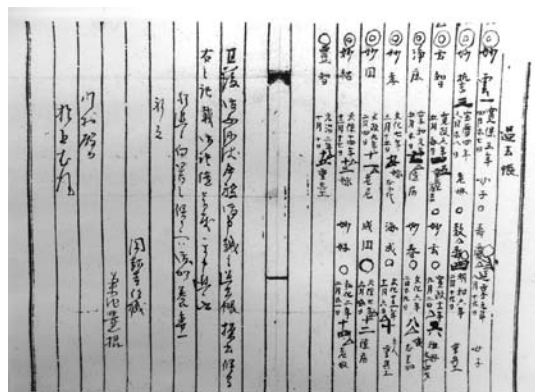
### ③歴代「十(重)兵衛」

「資料1」は味濱の高須家から豊橋の服部平之助に宛てた手紙の一部で、松江の歴代國松十兵衛をはじめとした法名(八代目の転宗で居士とある)が書かれている。焼失してしまった豊橋の國松家の過去帳を再度作成するために依頼して送ってもらったものである。



資料1 味濱の高須家からの手紙と一部拡大

次の「資料2」は、辻村の円超寺から「とは」宛てた、やはり法名を書いたもので、「資料1」と同じように、過去帳作成のため「とは」を経由して「まん」に送られたものであろう。



資料2 円超寺からの手紙

この2通の手紙と豊橋の国松家の過去帳を参考にして、歴代「国松十兵衛（国松重兵衛）」を没年順に並べてみると、

- 二代「重行（家圀）」 法名「釋善春」  
( ~ 1704 年没)
- 初代「重政（家次）」 法名「釋善徳」  
( ~ 1715 年没)
- 三代「富教」 法名「釋教専」  
( ~ 1742 年没)

- 四代「茂喬」 法名「釋教意」  
( ~ 1757 年没)
  - 五代「光同」 法名「釋教夢」  
( ~ 1766 年没)
  - ？「忠則」 法名「釋教寿」  
( ~ 1769 年没)
  - ？「為吉」 法名「釋玄智」  
( ~ 1794 年没)
  - ？「？」 法名「釋浄応」  
( ~ 1801 年没)
  - 六代「光重」 法名「釋性道」  
( ~ 1813 年没)
  - ？「忠明」 法名「釋海成」  
( ~ 1816 年没)
  - ？「？」 法名「釋成圓」  
( ~ 1838 年没)
  - 七代「光圀」 法名「釋浄護」  
(1797 年生 ~ 1845 年没)
  - ？「？」 法名「釋豊智」  
( ~ 1865 年没)
- 栗東市にある「写真1」の墓の主。隣にある「妙祐」は、国松家過去帳より、その妻で俗名は「辰子」と判明。
- 八代「忠平（泰能）」 戒名「泰能居士」  
( ~ 1887 年？没)
  - ？「作二？」 法名「厚德院釋願入」  
( ~ 1951 年没)

ということになる。

碧南市では、初代から八代目までの国松十兵衛が伝えられているが、それは、松江に出職した鋳物師に限定したものであり、実際には、国松十兵衛（国松重兵衛）を名乗った人物はもっと多くいたことになる。しかも、辻村と松江で同時に存在していた可能性もある。ただ、辻村の国松重兵衛が鋳物師として鋳造にかかわっていたかどうかは定かではない。

そういえば栗東市にある辻天満宮の、元禄7年（1694年）に釜六・釜七を大願主として江戸深川にて鋳造、奉納された銅製鳥居に刻まれた232人の寄進者の中に、国松十兵衛が2人（「国松十

兵衛」と「国松十兵衛」)いることもずっと気になっていたことだ。

#### ④ 残された課題

「資料1」「資料2」を比べてみると、法名が「教寿」「海成」の2人はどちらにもあり、月命日が同じ10日の「豊智」と「法智」なる人物も存在するが、同一人物である可能性もある。辻村の本家と出職・出店先の松江の両国松(国松)家にかかわった人物がいたということになる。

この3名を除くと、「資料1」に記載された人物は1人も豊橋の国松家の過去帳には無く、「資料2」の円超寺からの手紙に記載された人物だけが書かれていた。さらに、明治5年(1872年)に辻天満宮へ鉄湯釜を奉納した寄進者に「国松重兵衛」が名を連ねているが、その寄進者のほとんどが辻村に居職の鋳物師であったということを考え合わせると、松江の国松十兵衛家と辻村の国松重兵衛家が、非常に深い繋がりのある別の家系として存在していたことが推測される。

近江商法は、本家を江州において妻子もそこに住まわせ、商品は置かず、出店は支配人に任せていたが本家から細かい指図をして、主人は常に出店の巡回をしていたようだ。辻村を支配する膳所藩では、鋳物師に限らず出職、出店する際、出店先へ家族を連れていくことを禁じ、本宅は辻村に置き、妻子など家族は辻村に残しておくよう命じていた。しかし、江戸時代後期になると、出職先に家族をともなって定住するようになり、多くの出職者の辻村離れを招いたという実態があったようだ。

そんな中、国松十兵衛家に関しては、膳所藩の指示に従い、明治時代の初期までは辻村に本家を残しておいたと考えてもよいのではないかと思われる。

また、豊橋の国松家には、「三州松江村国松忠右衛門」にかかわる文書が2通ある。その文書の作成年が元文5年(1740年)と宝暦7年(1757年)で、「まん」が嫁ぐ100年ほども前のことである。しかも、「まん」は、辻村から嫁いでいるのに、松江在住の人物の文書があるのは不可解である。

「国松忠右衛門」とは何者なのか。国松十兵衛が出職、出店するときの名義人が「近江屋忠右衛門」であり、廃業届けを出した親類が「国松長右衛門」である。この2人が、豊橋の国松家に残る「国松忠右衛門」と深くかかわっている気がしてならない。ひょっとしたら「長右衛門」というのは「忠右衛門」の間違いではないかとさえ思えてくる。

この「国松忠右衛門」なる人物が、国松十兵衛家(国松重兵衛家)を知る上で、さらには、辻村鋳物師の出職について知る上での重要な人物であることは間違いない。残念なことに、今はまだ史料不足で、これ以上知る手がかりがない。

#### おわりに

豊橋の国松家の亡きご主人は、祖父が大好きで、「重兵衛さん」と慕って少年時代を過ごし、祖父に対する強い愛着の思いは今日まで変わらずに続いていたようだ。そこへ、私からの国松十兵衛に関する問合せの手紙が突然届き、とてもびっくりされたが、国松重兵衛(国松十兵衛)のことを調べている私を喜んで迎えてくれた。

お宅に調査に伺った際に、文化財展開催を伝えると、国松重兵衛のことを少しでも知りたいと、遠路碧南の地まで2度も足を運んでいただけた。その折に、お宅で拝見した国松家に伝わる文書を借用することができた。

12月11日、借用文書の返却で国松家を訪れた時はお元気だったのに、それから2か月と少しでお亡くなりになった。まだ調査半ばで、きっとどんなにか心残りであったらうと思われる。その強い思いを奥様が受け継ぎ、今後とも、さらに調べを進めたいとのことであつたので、微力ながら力になりたいと願っている。

今、過去と現在が確実に繋がっていると実感することができ、その不思議な縁に驚きと感謝すら感じる自分がいる。

## 協 力

國松本店（豊橋市）、松江区（碧南市）

## 参考文献

碧南市史料第 16 集『碧南市鑄物誌（上）』

『碧南鑄物のあゆみ』（碧南市鑄物工業協同組合）

『御鑄物師 勅許 国松十兵衛』（同上）

『栗東の歴史 近世 第二巻』（栗東町史編さん委員会）

碧南市史料第 69 集『訳注 大浜陣屋日記 上』